

略解

問題 1

\mathfrak{R} から \mathfrak{R} への写像 f に対し、「点 $a \in \mathfrak{R}$ で連続である」ことの定義を、次の命題が成り立つこととする。

$$\forall \epsilon > 0, \exists \delta > 0, \forall x \in \mathfrak{R}, |x - a| < \delta \rightarrow |f(x) - f(a)| < \epsilon \quad (1)$$

1. 写像 f が「点 a で連続でない」ことは、次の命題を満たすことに一致する。(1) の命題から、この事実を導け。

$$\exists \epsilon > 0, \forall \delta > 0, \exists x \in \mathfrak{R}, |x - a| < \delta \wedge |f(x) - f(a)| \geq \epsilon \quad (2)$$

以下では、写像 $f(x) = \begin{cases} x - 2 & (x \geq 1) \\ -2x & (x < 1) \end{cases}$ の連続性について考える。

2. 写像 f が点 0 で連続であることを、(1) に基づいて示せ。ただし、 δ の取り方が具体的に明示してあれば、厳密な不等式の評価は省略してよい。
3. 写像 f が点 1 で連続でないことを、(2) に基づいて表せ。ただし、 ϵ と x の取り方が具体的に明示してあれば、厳密な不等式の評価は省略してよい。

1.

$$\begin{aligned} & \neg(\forall \epsilon > 0, \exists \delta > 0, \forall x \in \mathfrak{R}, |x - a| < \delta \rightarrow |f(x) - f(a)| < \epsilon) \\ & \equiv \exists \epsilon > 0, \neg(\exists \delta > 0, \forall x \in \mathfrak{R}, |x - a| < \delta \rightarrow |f(x) - f(a)| < \epsilon) \quad (\because \text{ドモルガンの法則}) \\ & \equiv \exists \epsilon > 0, \forall \delta > 0, \neg(\forall x \in \mathfrak{R}, |x - a| < \delta \rightarrow |f(x) - f(a)| < \epsilon) \quad (\because \text{ドモルガンの法則}) \\ & \equiv \exists \epsilon > 0, \forall \delta > 0, \exists x \in \mathfrak{R}, \neg(|x - a| < \delta \rightarrow |f(x) - f(a)| < \epsilon) \quad (\because \text{ドモルガンの法則}) \\ & \equiv \exists \epsilon > 0, \forall \delta > 0, \exists x \in \mathfrak{R}, |x - a| < \delta \wedge \neg(|f(x) - f(a)| < \epsilon) \quad (\because \neg(p \rightarrow q) \equiv p \wedge \neg q) \\ & \equiv \exists \epsilon > 0, \forall \delta > 0, \exists x \in \mathfrak{R}, |x - a| < \delta \wedge |f(x) - f(a)| \geq \epsilon \end{aligned}$$

2. 任意の $\epsilon > 0$ に対し、 $\delta = 0.5\epsilon > 0$ を取る。このとき、 $|x - 0| < \delta$ という条件を満足する $x \in \mathfrak{R}$ に関して、 $|f(x) - f(0)| < 2\delta = \epsilon$ が成立する。よって、写像 f は $x = 0$ で連続である。
3. $\epsilon = 0.5$ とする。任意の $\delta > 0$ に対して、 $x = \max\{1 - 0.5\delta, 0.9\} \in \mathfrak{R}$ を取る。すると、 $|x - 1| \leq 0.5\delta < \delta$ かつ $|f(x) - f(1)| \geq |-1.8 - (-1)| = 0.8 > \epsilon$ となる。よって、写像 f は $x = 1$ で連続ではない。

問題 2

$S = \{a, b, c, d\}$ とする。 S のべき集合 2^S から、集合 $\{0, 1, 2, 3, 4\}$ への写像として、次のようなものを考える。

$$f(P) = |P|$$

ここで、 P は S の部分集合であり、 $|P|$ はその元の数を意味する。

1. 写像 f が単射であるかどうか述べ、その理由を挙げよ。
2. 写像 f が全射であるかどうか述べ、その理由を挙げよ。

-
1. 単射ではない。なぜなら、 $\{a, b\} \neq \{c, d\}$ であるが、 $f(\{a, b\}) = f(\{c, d\}) = 2$ となるからである。
 2. 全射である。全射の条件 $f(2^S) = \{0, 1, 2, 3, 4\}$ を満たすことは、 $f(\emptyset) = 0$, $f(\{a\}) = 1$, $f(\{a, b\}) = 2$, $f(\{a, b, c\}) = 3$, $f(\{a, b, c, d\}) = 4$ から確認できる。

問題 3

$f : A \rightarrow B$ を写像とする。 P, Q, R は A の部分集合、 $(S_\lambda)_{\lambda \in \Lambda}$, $(T_\lambda)_{\lambda \in \Lambda}$ は B の部分集合族である。このとき、以下の関係式を証明せよ。

1. $f(P \cap Q \cap R) \subset f(P) \cap f(Q) \cap f(R)$
2. $\bigcup_{\lambda \in \Lambda} (S_\lambda \cap T_\lambda) \subset \left(\bigcup_{\lambda \in \Lambda} S_\lambda \right) \cap \left(\bigcup_{\lambda \in \Lambda} T_\lambda \right)$

1.

$$\begin{aligned} y \in f(P \cap Q \cap R) &\iff \exists x \in P \cap Q \cap R, f(x) = y \\ &\iff \exists x, x \in P, x \in Q, x \in R, f(x) = y \\ &\implies \exists x, f(x) \in f(P), f(x) \in f(Q), f(x) \in f(R), f(x) = y \\ &\implies y \in f(P), y \in f(Q), y \in f(R) \\ &\iff y \in f(P) \cap f(Q) \cap f(R) \end{aligned}$$

よって、 $f(P \cap Q \cap R) \subset f(P) \cap f(Q) \cap f(R)$ が示された。

2.

$$\begin{aligned}x \in \bigcup_{\lambda \in \Lambda} (S_\lambda \cap T_\lambda) &\iff \exists \lambda \in \Lambda, x \in S_\lambda \cap T_\lambda \\&\iff \exists \lambda \in \Lambda, x \in S_\lambda \wedge x \in T_\lambda \\&\implies (\exists \lambda \in \Lambda, x \in S_\lambda) \wedge (\exists \lambda \in \Lambda, x \in T_\lambda) \\&\iff x \in \bigcup_{\lambda \in \Lambda} S_\lambda \wedge x \in \bigcup_{\lambda \in \Lambda} T_\lambda \\&\iff x \in \left(\bigcup_{\lambda \in \Lambda} S_\lambda \right) \cap \left(\bigcup_{\lambda \in \Lambda} T_\lambda \right)\end{aligned}$$

よって、 $\bigcup_{\lambda \in \Lambda} (S_\lambda \cap T_\lambda) \subset \left(\bigcup_{\lambda \in \Lambda} S_\lambda \right) \cap \left(\bigcup_{\lambda \in \Lambda} T_\lambda \right)$ が示された。

問題 4

集合 A における 2 項関係 S が次の性質を持っているとして、以下の問いに答えよ。

$$\left\{ \begin{array}{l} \bullet \forall x \in A, \quad xSx \\ \bullet \forall x, y, z \in A, \quad xSy, ySz \Rightarrow xSz \end{array} \right.$$

1. 任意の $x, y \in A$ に対し、 xSy かつ ySx であるとき、 xTy として関係 T を定義する。同値関係の定義を述べ、 T が A における同値関係となることを示せ。
2. 同値関係 T による x の同値類を $C(x)$ と書く。 $C(a_1) = C(a_2)$, $C(b_1) = C(b_2)$ という仮定のもとで、 $a_1Sb_1 \iff a_2Sb_2$ となることを示せ。なお、 $xTy \iff C(x) = C(y)$ であることは利用してよい。
3. 集合 A の関係 T による商集合 A/T (同値類を元とする集合) について考える。任意の $C(a), C(b) \in A/T$ に対し、 aSb のとき、 $C(a)OC(b)$ として関係 O を定義する。なお 2. の議論より、関係 O は一意に定まる。順序関係の定義を述べ、この関係 O が商空間 A/T における順序関係となることを示せ。

次のように、問題文中の条件を (a)(b) と表記することにする。

$$\forall x \in A, xSx \quad \dots\dots\dots (a)$$

$$\forall x, y, z \in A, xSy, ySz \Rightarrow xSz \quad \dots\dots\dots (b)$$

1. 同値関係 T の定義は、以下の条件を満たす 2 項関係である。

反射律: $\forall x \in X, xTx,$

対称律: $\forall x, y \in X, xTy \Rightarrow yTx,$

推移律: $\forall x, y, z \in X, xTy, yTz \Rightarrow xTz.$

• $\forall x \in A$ に対し、(a) より xSx, xSx が成り立つので、 xTx である。

$$\begin{aligned} & \bullet \\ & \qquad xTy \iff xSy, ySx \\ & \qquad \iff ySx, xSy \\ & \qquad \iff yTx \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} & \bullet \\ & \qquad xTy, yTz \iff xSy, ySx, ySz, zSy \\ & \qquad \implies xSz, zSx \qquad (\because (b)) \\ & \qquad \iff xTz \end{aligned}$$

反射律、対称律、推移律が成り立つので同値関係である。

2. $C(a_1) = C(a_2), C(b_1) = C(b_2)$ という仮定は、 a_1Ta_2, b_1Tb_2 を意味する。つまり、 $a_1Sa_2, a_2Sa_1, b_1Sb_2, b_2Sb_1$ である。

• a_1Sb_1 が成り立つとする。すると、 $a_2Sa_1, a_1Sb_1, b_1Sb_2$ と (b) より、 a_2Sb_2 が導ける。つまり $a_1Sb_1 \implies a_2Sb_2$ である。

• a_2Sb_2 が成り立つとする。すると、 $a_1Sa_2, a_2Sb_2, b_2Sb_1$ と (b) より、 a_1Sb_1 が導ける。つまり $a_2Sb_2 \implies a_1Sb_1$ である。

以上より、 $a_1Sb_1 \iff a_2Sb_2$ が示された。

3. 順序関係 O の定義は、以下の条件を満たす 2 項関係である。

反射律： $\forall x \in X, xOx,$

反対称律： $\forall x, y \in X, xOy, yOx \implies x = y,$

推移律： $\forall x, y, z \in X, xOy, yOz \implies xOz.$

• $\forall C(x) \in A/T$ に対し、(a) より xSx が成り立つので $C(x)OC(x)$ がいえる。

$$\begin{aligned} & \bullet \\ & \qquad C(x)OC(y), C(y)OC(x) \iff xSy, ySx \\ & \qquad \iff xTy \\ & \qquad \iff C(x) = C(y) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} & \bullet \\ & \qquad C(x)OC(y), C(y)OC(z) \iff xSy, ySz \\ & \qquad \implies xSz \qquad (\because (b)) \\ & \qquad \iff C(x)OC(z) \end{aligned}$$

反射律、反対称律、推移律が成り立つので順序関係である。